

# 論文誌等の完全オンライン化の意義

中島秀之

(情報処理学会副会長／公立はこだて未来大学)

現在、学会では論文誌や研究会報告等の論文を掲載した出版物の完全オンライン化を考えている（一般記事を掲載する学会誌については従来通り）。これまでは印刷されたジャーナルが主で、それらに掲載された論文が副次的にオンラインでも読めるようになっていた。この印刷物をなくし、オンライン版を正規の出版物にしようという計画だ。紙の時代からディスプレイの時代へと移行させるわけだ。我々の知る限り、学会としては世界初の試みだと思う（JAIR など、オンラインジャーナルという形態はすでに存在しているが）。

情報処理のリーダーとして、学会は情報処理技術の社会応用に先駆的に挑む必要がある。今回の完全オンライン化は、紙をなくすことが目的ではなく、オンライン化することで得られるメリットを最大限追求できるようにすることが主眼である。我々研究者も日頃の論文検索には Web を使うことが多いし、論文がオンライン化されていることによって世界中の読者から読んでもらえる可能性が増す。これだけなら現在も行われているような紙とオンラインの併用でも良い気がする。しかし、紙を一次媒体とし、印刷されたものが正規の論文であり、オンライン版はそのコピーにすぎないという従来の位置づけでは、オンライン化のメリットを完全に享受することはできない。第 1 に雑誌という単位でまとめて発行する必要がなくなり、論文ごとに速やかな発行が可能となる（これは海外の一部のジャーナルではすでに実施されており、採択された論文は紙媒体の発行前にオンライン掲載される）。掲載論文数や各論文の記述量の制約も減る。第 2 に、紙の論文には基本的には印刷可能な情報しか掲載できない。これに対しオンライン版を一次媒体とすることにより、メディアが多様化し、プログラムや動画などの配信も可能になる。

論文誌購読モデルも変わる。紙媒体がメインの場合は購読した号は自分のものとなり、将来にわたっていつでも参照できる。購読しなかった号は読めない。これに対しオンライン版の購読においては、購読期間中は過去の論文もすべて閲覧可能であるが、購読終了とともに一切が（一般向けに公開されたものを除いて）読めなくなる。

情報処理学会では 2008 年度より、まずは論文誌の完全オンライン化に踏み切る。研究会も準備ができ次第これに続くことになっている。発表会場から紙の資料が消える。研究発表の方法も変わる必要があるかもしれない。これまでは資料が聴衆の手許にあることを前提に発表していた人もいると思うが、これからは自分のプレゼンテーションのみで 100% カバーする工夫が必要である（必要なら自分で印刷した資料を配布することは可能であるが、あまりお勧めしたくない）。

なお、欧文誌「Digital Courier」はすでに原本がオンライン化されているが、来年 4 月から「Journal of Information Processing」の継続として再出発する。懸案であった Impact Factor の取得も、まず本欧文誌から始める予定で Thomson Scientific 社と相談しているのでどしどし英語論文を投稿していただきたい。

これはまだ検討中であるが論文のフォーマットも変わる可能性が高い。A4 2 カラムというフォーマットは紙に印刷することを前提としたものである。このフォーマットがコンピュータの小さい画面でいかに読みにくいかは皆さん経験済みだと思う。とりあえずは横長画面用に横に長いフォーマットの提供を考えている。ページという概念もひょっとしたら不要かもしれない。ディスプレイで見ることを前提としたフォーマットは、今のところ縦長のスクロールのようなものが良いように思われる（横書き前提）。Web ページで使われている HTML のようにブラウザに合わせて横幅も可変というのが良いかもしれない（数式を使う人やプログラムを掲載する場合には、書き手の側でもう少しコントロールしたいかもしれない）。

そして数年後には、もっと革新的な手法が現れることを期待している。オンライン化することにより、リンクの埋め込みや、動画の挿入の可能性が出てくる。これに関する対応はこれからのことになるが、ぜひ早急に対応したい。情報処理技術（つまり CGI などプログラムの利用）を併用することを考えればもっと多様な情報が埋め込められると思う。図は同じページにフォーマットされている必要はなく、適宜ポップアップすればよい。プログ

ラムの動作を見せることもできよう。これはさらに発展させることも可能で、静的なテキストが基本ではなくプログラムによる動的な表示を基本にすることも考えられる。

そして最後にその出版方法も変わる。紙による雑誌送付モデルが崩れるため、新しい出版システムを模索していかねばならない。現在 Book Park を通じて行っているオンデマンド印刷はその一歩であるが、まだ一歩でしかない。もっと先があるはずだが、それを学会独自で模索できない（そのための機能がない）ことが歯痒い。また、オンライン出版は従来のように毎月雑誌が送られてくるのとは異なり、基本的にはユーザが積極的に見に行くプル型のサービスとなるが、メーリングリスト等を使ったプッシュ型のサービスも残さねばならないだろう。

このように完全オンライン化の影響は大きい。学会として慎重に、しかし革新的に取り組みたいと考えている。ハンドブック等、今後の学会からの出版物もできるだけ革新的なものになるよう理事会として心がけているところであるが、会員の皆様の知恵と協力が期待されるのは言うまでもない。

#### 《 補足 》

執筆の手引きや各種規則（オンライン版についての著作権、改編・修正、巻・号・ページ番号のつけかたなど）、Journal of Information Processing の編集方針などの詳細は、別途公開する規則集などをご覧ください。

（平成 19 年 11 月 13 日受付）

中島秀之（正会員）  
h.nakashima@fun.ac.jp

東京大学大学院情報工学専門課程修了（工学博士）。同年、電子技術総合研究所入所。2001 年より産総研サイバーアシスト研究センター長。2004 年より現職。産総研情報技術研究部門研究顧問。認知科学会元会長、ソフトウェア科学会元理事、人工知能学会元理事、マルチエージェントシステム国際財団元理事、日本工学アカデミー会員、電子情報通信学会会員。

論文誌のオンライン出版（印刷物の廃止）に関する事務手続きの案内は以下：

[http://www.ipsj.or.jp/03somu/kinen\\_jigyo/50anv/d-library/dl-ronbun-200710kaikoku.html](http://www.ipsj.or.jp/03somu/kinen_jigyo/50anv/d-library/dl-ronbun-200710kaikoku.html)

